

参考文献

- アマルティア・セン著 池本幸生, 野上裕生, 佐藤仁訳 『不平等の再検討』 岩波書店 1999年7月15日.
- アマルティア・セン著 鈴木興太郎訳 『福祉の経済学』 岩波書店 1988年1月22日.
- アトニオ・ネグリ, マイケル・ハート著 水島一憲, 酒井隆史, 矢野邦彦, 吉田俊亮訳 『帝国—グローバル化の世界秩序とマルチチャートの可能性』 人文社 2003年11月20日.
- イヴァン・イリッチ 「ニーズ Needs」 シュルツァー, サックス編 『脱「開発」の時代』 昌文社 1996年9月5日.
- 宇津善行 「宇津権右衛門と秘薬宇津救命丸」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会
2013年4月23日.
- 大田好信 『トランスポレーションの思想—文化人類学の再想像』 世界思想社 1998年5月10日.
- 奥備一彦 「宇都宮におけるLRTと基幹としての公共交通整備の必要性」 放送大学修士論文 2011年12月.
- 加藤光賢 「壬生養生局における看護人の発祥と当時の看護」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会.
- 加藤光賢 「近代看護の先駆者 黒羽藩大関和」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会.
- 菊地卓 「坂東の大学と田代三喜, 曲直瀬道三」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会.
- 黒木登志夫 『健康・老化・寿命, 人のいのちの文化誌』 中公新書 2007年5月25日.
- 下山淳一 『トコトやさしい超伝導の本』 日本工業新聞社 2003年3月30日.
- 鈴木隆雄 『超高齢社会の基礎知識』 講談社 2012年1月20日.
- 鶴見和子 「内発的発展の系譜」 鶴見和子, 川田侑編 『内発的発展論』 東京大学出版会
1989年3月10日.
- 中野正人 「県内初の西洋医 斎藤玄正とは」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会.
- 西川潤 『人間のための経済学』 岩波書店 2007年11月27日.
- 西川潤 「内発的発展論の起源と今日的意義」 鶴見和子, 川田侑編 『内発的発展論』 東大出版会
社団法人日本薬学会 『知っておきたい一般薬品』 東京化学同人 2006年3月27日.
- 橋本禮治郎 『リニア新幹線, 巨大プロジェクトの「真実」』 集英社新書 2014年3月19日.
- 林敏彦 『経済学入門』 放送大学教育振興会 2013年3月30日.
- 日野原正 「栃木県の民間療法」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会 2013年4月23日.
- 松下弘, 熊谷勝子 『健康日本と地域保健計画』 勁草書房 2003年4月15日.
- 松本宏道 「壬生藩工 太田信義と太田胃散」 『とちぎメテカルヒストリー』 獨協出版会.
- 真野俊樹 『入門 医療経済学』 中公新書 2006年6月25日.
- 真野俊樹 『健康マーケティング』 日本評論社 2005年4月15日.
- 森下靖雄監修 『大学の「知」を活用した新しい地域活性化「健康医療都市・前橋」への挑戦』
日経BP企画 2007年11月5日.
- 和田攻他2 『看護大専典』 医学院書 2013年1月.

あとがき

2012年1月、私は、放送大学修士論文「宇都宮におけるLRTを基幹とした公共交通整備の必要性」の最終口頭試問の席上、指導主幹坂井素恵教授から「自分なら、この論文からあと2本書ける。どうしますか?」と質された。2本とは「LRTによるまちづくり提案」と「「公共の空間」について研究すること」と私は理解した。

後者については、私の経験と先生に話したことも踏まえての提案であると察した。というのは、LRTの導入に関しては立場の違いや多くの見方があり、賛否が存在するのは当然である。しかしテーマの故かとか政策の具にされ易く、両者のフラクな意見交換の場が持ちにくい状況が学にある。そこで「異なった意見を持つ人々の出会う相互交渉の空間」(ア-レント)、「それを民主的な意見形成のための討議の空間」(ハーバース)注とする。そして、私のこれまでの市民活動を通して研究することなのである。

その時分、私は既に古稀を超え残り少ない人生と専ら2人で海外旅行や各地でのゴルフを楽しむことに決めていた。

とは言うものの放送大学の修士論文は、費用便益分析がメインであり、数字を握って投資の正当性をバックアップする一つの指標を提示しにすぎないこと。別の表現をすればLRTの導入が実行されれば、現在の問題が、お金の換算してどれ位改善されるかを項目ごとに表したにすぎない。現状の改善をベースにしてその上に積極的にとらなまらと創るのかという結論が示されていない。即ち論文は中途半端であるという思いはあった。日が経つにつれ、言いたい放題でその責任を取らない論文に罪悪感さえ持つようになった。「公共の空間」の研究はともかくとして、「LRTによるまちづくり提案」をする論文執筆のエネルギーは、年齢を考えると時間的に猶予は無く、先送りすると消滅してはしまうという危機感も次第に強くなった。

ところがここで私には、大きな欠陥があることに気付いた。パソコン操作の技術が皆無なのである。これでは論文作成上他の学生について行けないとの恐れもあり逡巡する日々が続いた。いつの間にか、週一回のパソコン教室にも通う自分があった。家では「天声人語」をひたすら打ち込み、書式を作成も一応クリアし、表計算も何とか出来るようになった。しかし、パソコン操作に気を取られ過ぎて、文章の作成や組立て、論旨の展開、つなぎの仕方などの桌で納得のいくものにならず、かえって時間と費してしまうことが多く、自分の能力では手書きに勝るものは無いと思うようになっていた。時間との競争の中で、LRTを活用して「命と健康を支える都市・宇都宮」の可能性、いわゆる「交通まちづくり」と提案することを目的に中村祐司先生の門下に入った。

パソコン操作能力の向上期間も必要だし、取組中の市民活動である「LRTの整備を確実に前進させること」にも力を注がねばならない。2014年には「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」を宇都宮に誘致し開催まで漕ぎ着けるのに1年間は必要との思いもあって、3年かけて修士と終える積りでいた。中村祐司先生の特別な配慮と関係先の許可により、論文は手書きでも受け付けて下さることになったこと、全国大会も会員のやる気と協力が十分であり、行政のサポートも取付けて、開催の見通しもついたので、論文を2年間で仕上げ、提出する決心をした。

ここまでの2年足らずの院生期間は、私にとって幸運であった。M-1とM-2の前期で履修した「ニズメ分析」「内発的発展」「文化のグリコロール・流用」「福祉と潜在能力による捉える考え方」は論旨の展開に大変有益であった。また「健康」は見たではなく、売買でい

「状態」であり、その状態を実現するために「健康獲得財」の入手が必要である」との私の考え方に、アマレティア・センの「福祉と潜在能力に於て捉える考え方」が類似していることに驚き、執筆に勇気を与えてもらった。そして「日本語論述表現法」で論文記述と形式にルールがあることを教えられ、役立てることができた。

特に、中村祐司先生の時宜を得たアドバイスと粘り強いご指導、そしてゼミ同僚諸氏のご協力もあって何とか2年間で論文提出に漕ぎ着けた。心から感謝を申し上げる。また同時期に、私が力を注いでいた「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」は、2014年11月29日、氷雨の降る悪天候にも拘らず、午前中の研究発表会(論文58編を共和大学の6教室で発表・討議)に約300名、午後コネクトのフォーラムには約500名が参加し、中味の濃い講演と議論が展開され、有意義な会となり、成功裏に終えることができたことを付言しておく。

ところで、論文に必要な情報を求めて取付中、大きな問題があることに気付いた。行政の事業は、税金を使う活動であるため、特定企業や製品の育成支援には、自ずと限界があること。支援される中小企業には、結果を出すまでの資金や能力に乏しいところが大半で、例えあったとしても、そのための余裕がないことなどの事情もあって没する事例も多い。両者の間に空白が存在することである。また行政の人事は、セネリストの養成を主眼としている為か、2~3年で他部門へ移動するので、問題の掘り下げや解決、継続性に弱みがある。ここを埋める組織が必要である。行政・企業・団体・学識経験者らによるNPOの立上げを検討すべきである。

これからの私は、2020年の東京オリンピック、2022年の栃木国体において、外来者が公共交通を利用して、安心・安全に栃木県内、就中、宇都宮都市圏を自由に楽しく移動できるシステムの構築とそのインフラが完成した暁に、中心市街地、JR宇都宮駅及び東武宇都宮駅の周辺、郊外、学校周辺等が、それぞれの個性を生かして、どんなまちになるべきか、市民団体「雷都レールとらぎ」、「駅東まちづくり21」、NPO法人「まちづくり推進機構」を通して提言する。その時には「公共の空間」のことも意識しながら...

最後に、論文執筆と市民団体の活動で、この2年間、飛び回った私を暖かく見守り、旨い食事と晩酌を用意し続けて呉れた専・鈴子に感謝し、同時に旅行やゴルフを一諸にする楽しみを奪っていたことを謝する。でももう少し頑張ることの誇りを乞うてパンを置く。